工学系学部生の留学と英語学習への意識
— 海外への興味を妨げているものは何か —

Engineering Students' Negative Attitudes toward Study Abroad and Learning English
— What are the obstacles? —

松元 宏行*1
Hiroyuki MATSUMOTO

キーワード：留学、英語学習、グローバリゼーション
Keywords: Study Abroad, Learning English, Globalization

1. はじめに

国は平成24年4月に日本人学生の海外派遣と英語学習の充実化に向けたグローバル人材育成の方針を打ち出した。また平成25年5月に安倍首相が発表した第2次成長戦略の中には、日本人学生の海外留学の活発化がうたわれ、外国人教員の登用やTOEFLの活用にも言及している。なお1980年代の初頭までは留学制度が充分整備されていない状態でも、大学生は留学でなくとも卒業旅行や夏休みを利用して私費で海外に見聞を広める者が少なくなかった。ところが現代の日本人学生はあまり海外に興味を示さなくなった。これほどの原因に起因するのであろうか。本研究では、現時点で学生が考える海外への興味がどのようなものか考察し、合わせて関連の深い英語学習についても学生の考えの実態を検証する。

2. 学生への調査アンケートの項目と結果

筆者は就職力科目である「キャリア設計」の授業で工学部1年生165名に「国際化に関する問題についてうかがいます」という形でアンケート調査を行った。アンケート項目は、以下の通りである。②については興味のある者A、興味がない者Bとして分類した。①あなたは海外について興味がありますか。

A 興味がある 116 B 興味がない 49
②あなたは海外旅行をしたことがありますか。
A ある 72 ない 44 B ある 8 ない 41
③あなたは海外生活をしたことがありますか。
A ある 115 B ある 1 ない 48
④あなたは海外に行きたいと思っていますか。
A 思う 100 思わない 16 B と思う 6 思わない 43
⑤あなたは留学したことがありますか。
A ある 7 ない 109 B ある 0 ない 49

※1 群馬大学大学教育・学生支援機構

公益財団法人日本工学教育協会 平成25年度
工学教育研究講演会講演論文集 — 642 —
3．アンケートの結果分析

アンケート結果を分析すると以下の傾向が示された。まず、海外に興味のある者は海外旅行の経験が多く、再び海外旅行を希望している者が多い。一方、海外に興味を持たない者は海外旅行の機会が少ない。また海外での過ごし方が望んでいない者が多い。ところが、留学といえることになると海外に興味を持つ者であっても、現時点で留学を望む者は27%に留まっている。「考えていない」「どちらとも言えない」の残り73%に留学を躊躇する理由を聞くと、前位は英語力の不安、次位は経済事情、第3位が海外の生活環境の問題であった。一方、海外で英語力を学びたくなる者への同じ皆問では、前位は英語力の不安、次位が医薬の不安、第3位は海外滞在という形に興味が無いというものであった。

では、留学の大きな障害となっている、語の問題を分析すると、海外に興味を持つ者、持たない者の両者の7割から8割が、日本語と英語の両者が必須であると言えた。

英語について質問すると、やはり両者とも7割から8割が英語学習的重要性を主張した。ただし、外国に興味を持たない者は、英語が好きであると答えた者が多い傾向にあり、外国に興味のない者は、英語は嫌いであるが学習は必要という者ばかりであった。

英語の学習時間については、外国に興味を持つ者の方が長時間学習する数が多かったが、それでも学校の授業以外で学習しない者が30%、週間に1~2時間しか自己学習をしない者が50%というものであった。外国に興味をもたない者では、自己学習を全くしない者が47%、週に1~2時間の者が42%で非常に問題ある結果となった。

4．考察

今回のアンケート調査では、外国に興味のある者の方が海外に行きたいという傾向が示された。しかしながら、留学となるとこの傾向は多少異なってくる。つまり留学に興味を持つ者が多いということである。この傾向は理由としてアンケート調査から、見えてきたのは学術への不安と学術にかかわる経済的問題である。学術力については、現在の群馬大学では習熟度別クラス編成により、システムが英語教育に転向を取った。しかしながら、容易に学生の英語力が向上するのは難しい。その理由として、大学の英語授業では高校までに英会話を踏まえさせる必要がある。今後は希望する大学の英語教育には至っていない。また、大学での絶対的な英語授業の時間数も少なく、実際、大学の授業だけでなくコミュニケーション英語の習得は夢のまた夢である。その意味でも学生自身学習の時間は限るが、それを選ぶことが重要になってくる。基本的な英語力の不足→→難しく不親切な大学英語→→ハードリング→→自己学習時間の決定的不足→→英語苦手意識→→留学への躊躇→→的な連鎖が起きているかもしれない。そこに経済的負担の問題が重なれば、留学というもののが一定条件となると思われる。経済問題は奨学生金制度の充実あるいは緩和されるかもしれない。本研究では学生が英語学習に相当の不安を抱いていることが解ったが、この感覚を容易に払拭するのは困難と言えよう。発想の転換で留学＝英語学習（英語）という要領を捨てるのは、もう少し考えるとならない。

（問い合わせ：matsugen@gunma-u.ac.jp）

参考文献
(1)松元宏行：就業能力育成のための授業とカリキュラム編成に関する一般考察 平成23年度工学教育研究講演会論文集 pp146-147
(2)松元宏行、天谷賢児、弓守康文、Barry Keith：工学系学生のための初年次教育改革の実践 平成24年度工学教育研究講演会論文集 pp636-637
(3)群馬大学国際化推進基本計画 pp1-5 (2013)